

真庭の土地の約 80 パーセントは森林が占めており、林業・製材業は、蒜山地域の基幹産業になっている。19 世紀後半には、商用の材木に適した樹種を広範囲に植える取り組みが開始された。この当時、伐採した木は、川を使って岡山の街まで運ばれた。しかし、1936 年には、鉄道網が開通したことで、真庭は関西圏に向けた主要な材木の供給拠点に変貌した。製材にするために栽培された主な種は、スギ、ヒノキ、マツである。

1975 年頃には、消費者の嗜好の変化や安価な輸入木材の流入により、林業は低迷し始めた。1980 年代を通して真庭の産業は比較的好調が続けていたが、地元の実業界のリーダー達は、地場産業を守るべく、国産材を活用するより良い方法を模索した。そして、持続可能性、保全、そして、森林管理と木材加工に現代技術を取り入れることに力を注いだ。真庭を日本の他の材木の生産地と差別化するイノベーションの一つが、採取した材木を乾燥させる先進的な技術を採用したことだ。今日、真庭市は、林業資源を戦略的に整理・管理するため、センサーを備えたドローンや、クラウドデータベースを活用している。また、同時にその木材の効率的かつ環境に配慮した活用を可能にする新しい手法（例えば、クロス・ラミネイティド・ティンバー（CLT）などの技術）を模索している。

1990 年代中頃にヨーロッパで開発された CLT は、その美しさや汎用性によって、近年の日本で活用が進んでいる。CLT は、複数の薄い板を直交するように積み重ねて接着することにより、大きな木製パネルを作り出すことで生産される。CLT で得られた材料は、標準的な木製パネル材と比べ、高い安定性、耐火性、断熱性を示すが、木の自然な色合いや木目も残している。CLT は再生可能な資源から作られるため、コンクリートに代わる、環境に優しい材料となっている。

真庭の木材産業から排出される廃材やおがくずは、その地域社会に利益をもたらすように活用される。2015 年以降、真庭バイオマス発電所において、毎年発生する 78,000 トンの廃棄物が有用なエネルギーに変換されている。この発電所は、真庭市の 22,000 世帯をまかなうエネルギーを超える 10,000 キロワットを発電し、余剰電力は、外部の電力会社に販売される。

日本建築は、伝統的なものも現代的なものも、ミニマリズムに基づく設計を行い、材料には軽量のものを用い、屋内外を隔てる外壁は多孔質のものとする傾向がある。真庭では、木材は以前から重要な要素とされており、周囲の森林との永続的関連性を、至る所で見ることができる。福田神社の優美な軒のような歴史上重要な構造物から、最新の CLT 技術を取り入れた新しい建物まで、真庭は木材で成り立ち、木材は真庭を作っている。